

なんら予備知識もないままに、中西部日本文学研究協会(MAJLS)主催の学会に参加した。本年の開催校たる、インディアナ州ラファイエットのパデュエ大学で教鞭をとる、関根英二先生からのご招待である(11月6-8日)。年次会も今回で既に七回を数える。1993年には『日本文学の詩学』。1994年には『物語りの欲望』(両者からの抜粋17論文の翻訳は96年に『歌の響き…』[森話社刊]として日本でも出版済)。

1995年度にはPMAJLS(学会プロシーディングス)第1巻として『日本の演劇性とパフォーマンス』、96年度には第2巻『日本文学研究の見直し』、97年度の第3巻には『日本文学における雅/俗のダイナミックス』という充実した報告が既に刊行されており、近々第4巻『日本文学研究における新しい歴史主義』も発刊の予定(詳しくはMAJLS,1359 Stanley Coulter Hall,Purdue Univ.W.Lafayette,IN.47907,U.S.Aまで)。

代々の基調講演を見ると、日本からは詩学の大家、川本皓嗣を始め、渡辺慈司、水田宗子、高橋享、上野千鶴子、柄谷行人、小森陽一といった当代を代表する話者が招待され、合衆国側からも、映画のドナルド・リチー、文学のアール・マイナーなどと、その充実ぶりには圧倒される。北米の日本研究でも、文学に絞った学会というのは、ほかに存在しないらしく、中西部に限定するのもかえって不都合で、来年には全国学会に昇格の予定とも。本年の主題は『日本文学における恋愛と性』。招待講演の一方が、最近『「色」と「愛」の比較文化史』でサントリー学芸賞受賞の佐伯順子氏というのは尤として、もう一方が、本人の記憶に間違いのない限り、未だ嘗て恋愛や性を論じた例しもないければ、日本文学の論文など皆無の小生とは如何?

30本を越す報告に逐一言及できないが、女性の地位や発言権といった観点からする『とりかえばや』論や玉鬘論、時候のchronotoposを巡る平安文学論から始まり、語り物の『鎌足』の女性供犠の神話類型、山東京伝の『剔り継ぎ銀煙管』における男女シャム双児型フリークの処世術分析(一身同体が痴話喧嘩をしたり

米国日本文学談義

連載②
ニューヨーク通信③
総覧絶景「日本文学における恋愛と性」

国際日本文学研究会
センター研究員・
総合研究大学院大学助教授
稲賀繁美

して愉快)など最初から刺激的。

『雪国』と資本主義」という、シカゴ大学のノーマ・フィールド(ご本人もご出席)が黒幕らしい問題提起では、縮織りを鑑賞する島村の態度が資本主義の末端に発生している搾取の実態を隠蔽する行為とされ、経済関係を審美化する川端の姿勢の是非を巡って激論が交わされる。三島、大江、大島渚といった常連の国際的競争力が改めて検討されるとともに、植民地放浪の「無宿浪人」の倫理性や、「舞踏」の海外での成功のイデオロギー的意味が問い直される。

近代日本の「恋愛」観成立を巡っては、北村透谷のキリスト教観、若松賤子の翻訳思想、与謝野鉄幹、晶子、登美子の縫れ合いが解読される。さらに円地文子の文体を批評する室生犀星の屈曲、作品を知らないといささか把握困難な衣笠貞之助論、金井美恵子論そして津島佑子論など。

田村泰次郎の『肉体の門』、高橋睦郎の『誓歌』、遠藤周作の『海と毒薬』と『死海のほとり』および村上春樹の『ねじまき鳥クロニクル』を纏めて扱ったセクシオンは意外な通底性を明るみに出す。人間の脳内に接続する「井戸」(春樹)、ナチ収容所で石鹸へと実体変化する「コバルスキー」(周作)、世界の意味の発生源としての「口の穴」(睦郎)、そして資本と美と政治とがそこで三つ巴となる肉体(泰次郎)。ラカンの「objet petit a」や「point de capiton」の比喩に頼らずとも、「クラインの壺」の底=入り口の形象化に「性」文学の極限が仄見える。

その倒錯の極みたる谷崎潤一郎研究には、伝記的、原型論的ほかの切り口があり、恋愛と色情の未分化に近代主義の残滓を指摘する立場もある。とまれ谷崎文学を窃視する研究態度に、谷崎自身の窃視を告発する権利があるか、との問いは貴重だった。鬼神母や山姥といった土俗的形象の活用が検討されたあと、最終のラウンド・テーブルが盛況。吉屋信子、柳美里、内田春菊、松浦理英子の4人を通して、性風俗の世相が克明な立体感を帯びて現れた様には感動した。かく申す小生は永沢光雄『AV女優』をめぐる「告白と露呈」を一席。

思

考

の

隅

景

思想